國學院大學学術情報リポジトリ

「魔法」という矛盾：「魔法少女」形成期における「魔法」の位置付けについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 研士, Ishii, Kenji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000381

「魔法」という矛盾
—「魔法少女」形成期における「魔法」の位置付けについて—

石井研士

一、はじめに

筆者は「魔法と変身」と題して、「魔法少女」形成期における「魔法」について論じたことがある。[1]「魔法」は宗教学の領域における重要な現象・概念である。また、「変身」は現代日本社会においても広く見られる現象、欲求であり、現在まで、アニメやマンガの主要モチーフになっている。戦後、日常生活における神社や寺院との関わりが減少し、儀礼文化としての宗教行動が薄れていくときに、多様なメディアを通して、かなりの量の宗教情報が流通している。[2] 本論文は、「魔法」と「変身」をテーマに現代日本における宗教性について考察することを目的としている。

「変身」が主要なモチーフとなっているアニメ・マンガのジャンルは「魔法少女」と「ロボット」であるが、とくに前者は、「今日、これほどまで安定した支持を得ているジャンルというのも、その視野を実写作品に広げたとて、そうざらにあるものではない。[3]」

「魔法少女」というジャンルがどのような限定的な意味を持つかについてはかなりの程度曖昧である。「魔法少女」が「魔

法使いサリー」を嚆矢とすることは、一般的に広く認知されている。『日本のアニメ全史』[4]では「魔法使いサリー」の登場によって「美少女＝魔法使いの概念が生まれる」[5]と記されている。研究者も同様で、須川亜紀子は著書の巻末に伏した付録「おもな女の子向け「魔法少女」テレビアニメ」の最初に魔法使いサリーを挙げている。[6]登丸あすかも須川の研究を踏襲して、魔法使いサリーを最初としている。[7]おおよそ、アニメの通史、「魔法少女」を扱った著作論文は、ほとんどが同様の判断をしている。

一般的に、「魔法使いサリー」はテレビ放送のアニメとして知られているが、アニメに先だってマンガが月刊の集英社の少女雑誌『りぼん』（昭和四一年七月号―昭和四二年一〇月号）に掲載されている。テレビでの初回放送は昭和四一年一二月五日で終了は昭和四三年一二月三〇日、全一〇九話が放送された。

拙論「魔法と変身―「魔法少女」形成期における「魔法」」では「変身」をテーマにして、魔法少女、魔女っ娘（子）を扱い、このジャンルの嚆矢として「魔法使いサリー」を取り上げた。しかしながら、サリーは、基本的に、変身することをしない。魔法少女で「変身」がテーマになるのは、東映アニメーションが魔法少女シリーズ第二作として制作した「ひみつのアッコちゃん」からである。「魔法使いサリー」と「ひみつのアッコちゃん」は、「魔法少女」というジャンルを構成たらしめたのであり、その後の作品と比較して格段に人気のあった作品である。「魔法使いサリー」の最終回で、後継の番組として「ひみつのアッコちゃん」が紹介された。一般的な「次週からは〇〇」という告知ではなく、最終回が終わった後に、サリーが登場して自らお礼を言い、「すごくチャーミングでお茶目な女の子、その名はアッコちゃん」と紹介し、アッコちゃんの「よろしく」という挨拶に続いで次回の放送内容が流された。「魔法使いサリー」の成功と東映動画による魔女っ娘シリーズの継続を強く表すものであった。

二、魔法少女としての「ひみつのアッコちゃん」

「ひみつのアッコちゃん」は、テレビではNET系列で月曜一九時から三〇分番組として放送された。放送期間は昭和四四年一月六日から昭和四五年一〇月二六日まで全九四話であった。最高視聴率は二七・八パーセント、平均視聴率も「魔法使いサリー」を超える一九・八パーセントと大ヒットした。[8]

アニメや特撮のヒロイン像の特徴を巧に表現して見せた斎藤美奈子『紅一点論』[9]では、主人公のアッコちゃんは「シンデレ

『魔女っ子大全集東映動画篇』株式会社バンダイ

ラ型魔法少女」で、「「あたしこそが主役」という女の子の自己中心的な発想にマッチした」と指摘されている。[10]

企画を担当した東映動画の横山賢二は「『アッコ』の時は、最初から私が企画を進めました。『サリー』は他人に魔法をかけて、相手を変えるけれど、『アッコ』の場合は自分自身が変化していく。そういう違いをつけることによって、視聴者にとって身近な、現実味のある女の子の物語を作れれば、と考えたんです」[11]と述べている。同様のことを演出を手がけた池田宏も述べており、[12]制作側で共有されたイメージが存在した。

「ひみつのアッコちゃん」の概要を公式ホームページから引用すると次のようになる。

加賀美あつ子ことアッコちゃんは、パパが豪華客船の船長をしているので、普段はママと二人暮し。アッコは、大切にしていた手鏡が割れてしまい、お墓をつくってあげます。その晩、輝きながら天へと登っていく鏡。そしてアッコは鏡の精から、鏡を大切にしてくれたお礼にとコンパクトをもらうのです。それは「テクマクマヤコン」の呪文を唱えると、望むものなんにでも変身できる魔法のコンパクト！お転婆で、泣き虫だけど友達思いのアッコが、気が強くてあわてん坊のモコやモコの弟で姉思いの熱血漢のカン吉、ガキ大将で意地悪もするけど人情家の大将、大将の弟の少将に、チカ子、ガンモたち仲間と加賀美家の飼い猫シッポナや赤塚家に居候中のネコのドラや動物たちと、魔法のコンパクトを使っていろいろな事件を解決していきます。

（http://www.toei-anim.co.jp/lineup/tv/akko/）

「魔法使いサリー」には、箒にまたがって空を飛ぶ姿とか、一部に「魔女」を意識した表現が見られる。これらは直接「魔女」を意識したというよりは、制作の直接の動機となった「奥さまは魔女」のモチーフを受け継いだものである。少女向けア

ニメ第2弾と位置付けられる「ひみつのアッコちゃん」では「魔女」のイメージは払拭されている。普通の女の子に変身能力を持たせることで子供により親しみを持たせようとする意図がよく理解できる。魔法の小道具、マスコットの動物、美形のキャラクターという魔法少女に必須の要素は、サリーを後継したアッコで成立を見たことになる。

三、アッコちゃんの魔法

サリーが、文字通り魔法の国の王女である故に魔法が使えるのとは異なり、主人公の加賀美あつ子（以下「アッコちゃん」）は普通の小学校五年生である。アッコちゃんが不思議な力を使えるようにいたった経緯は第一話で描かれている。映像を文字化すると以下のようになる。

鏡を埋めて十字架を立てた土饅頭のお墓に不思議な光が降りてきて、割れた鏡の破片が中に浮かび元の通りになる（ひびは入ったまま）。「ありがとう、アッコちゃん」「私は鏡の精。割れてしまったんだけど、アッコちゃんのお蔭でお星様になることができたのよ。」「壊れた鏡はお星様になるの？」「そう、ただし人間にかわいがってもらった幸せな鏡だけが星になれるのよ。ラミパスラミパスルルルル。」「なあにそれ」「鏡の国の言葉で「さようなら」っていう意味よ」「これはお礼の印。」

こうしてアッコは星から飛んできたコンパクトを受け取り、コンパクトに記されていた「テクマクマヤコン」が変身のための、「ラミパスラミパスルルルル」が変身を解くための呪文になったのである。

コンパクトを手に入れたアッコは、まず星の王女様に変身する。斎藤美奈子が指摘するような「シンデレラ型魔法少女」であるが、全九六話を通してみたときに、アッコが変身するのは「シンデレラ」ばかりではない。むしろ違ったものへの変身が圧倒的に多いのである。

図表1は全九六話でアッコちゃんが変身したものの一覧である。文脈を省略してあるので、なぜそのようなものに変身したかは理解できないと思うが、アッコちゃんの「変身」にかなりの特徴のあることがわかる。

アッコちゃんが変身するタイプは、「シンデレラ型」「小動物」「人間」「その他」の四種類である。

第一の斎藤美奈子が「シンデレラ型魔法少女」と呼ぶに相応しい「シンデレラ型」であるが、この変身の事例はわずかである。後に述べるように、物語の基本的な枠組みからいっても、

図表１　アッコの変身：各話

第１話	星の王女様、父親、森山先生
第２話	小さな女の子
第３話	犬、女神
第４話	お姫様、牛若丸、クレオパトラ、ガンマン、ネズミ
第５話	シッポナ、母親
第６話	銀行のお姉さん、婦警
第７話	花の精、ハト、母親
第８話	もこちゃん、高井さん、森山先生、星の王女様
第９話	ネコ
第10話	もこちゃん、カラス
第11話	易者、子犬、カラス
第12話	先生のお嫁さん候補、犬
第13話	スター、ネズミ、友だちの妹、ネコ
第14話	森山先生、少将
第15話	ブルドック
第16話	シッポナ、化け猫
第17話	オウム、犬
第18話	ガードマン、婦警
第19話	トビウオ、白鳥
第20話	森山先生
第21話	もこちゃん
第22話	医者の娘
第23話	落語の師匠
第24話	女性
第25話	たけしのお父さん
第26話	金持ちの百合子ちゃん
第27話	森山先生、やす子さんの母親
第28話	森山先生
第29話	とかげ女、天使
第30話	カッパ
第31話	タヌキ
第33話	10年後の自分
第34話	祐子ちゃんの書いた母親像の女性、男性警備員
第35話	赤ちゃん
第36話	牛、めぐみちゃんの母親
第37話	シッポナ、日本少年少女心配事センターの女性、森山先生、幽霊
第38話	鳩
第39話	カエル
第42話	女中
第43話	カンガルー
第44話	ハト
第45話	オウム
第46話	鳥、母親
第47話	大きな鳥
第48話	小鳥
第49話	賢太の父親、お化け
第50話	サンタクロース
第51話	婦警、犬のぬいぐるみ、犬
第52話	10年後の自分
第53話	シッポナ、鳥、大将のおじいさん
第54話	海へ流そう悲しい涙
第54話	人魚
第55話	子猫
第56話	鬼
第57話	看護婦、掃除のおばさん、あばあさん、花子
第58話	チンドン屋
第59話	ウサギ、雪女
第60話	お雛様、流し雛
第61話	ファッションモデル
第62話	シッポナ
第63話	母親、シッポナ
第64話	こけし、お花ちゃん
第65話	緑のおばさん
第66話	大将（友だち）の父親
第67話	先生
第68話	ネコ、オウム
第69話	婦警、ガーバー、泥棒、鯉のぼりの神様
第70話	蝶々、ネズミ、悪人
第71話	鳥
第72話	森山先生
第73話	蝶々
第74話	大将、もこちゃん、ガーボー、大将に似た偽物
第75話	ツバメ
第76話	亡くなったひとみちゃん
第77話	小鳩
第78話	看護婦
第79話	子犬
第80話	ヤマンバ、鷲
第81話	母親
第82話	犬、森山先生
第83話	ハト、ウサギ
第84話	鷹
第85話	百合子
第86話	鯛になって黒鯛を探しに行く
第87話	蝶々、鷲
第88話	なっちゃん
第89話	
第90話	蜂
第91話	ハト
第92話	ちか子、ガーボー
第93話	スズメ
第94話	鷲

*登場人物の名前はそのまま

周囲に認知されるような形で変身して活躍することは困難である。変身した外形から「シンデレラ型」に該当するのは、かなり広義にとっても「星の王女様」（第一話）、「女神」（第三話）、「お姫様」「クレオパトラ」（第四話）、「花の精」（第七話）、「星の王女様」（第八話）、「先生の花嫁候補」（第一二話）、「天使」（第二九話）、「人魚」（第五四話）の九回で、全九四話中八話に過ぎない。

私が「基本的な枠組みから困難」というのは、周囲がアッコちゃん本人と判断できる形で変身することが不可能だからである。アッコちゃんが鏡の精から鏡をもらったところへ母親が部屋に入ってくる。母親に「魔法の鏡よ。お姫様になれるの」といって呪文を唱えるが変身できない。アッコちゃんは「人が見ていると鏡の魔力が効かない」と理解するのである。変身の場面を他者に見せられないということは、本人と変身後の人物（や動物）が同一であることを証明することがきわめて困難であることを意味している。アッコちゃんは何に変身しても自己満足にとどまることになる。

「星の王女様」（第一、八話）になるのは、鏡の精と会話した後の夜一人自室でのことで、他者は存在せず、「ステキね」と羨望の眼差しで見られることもない。「お姫様」「クレオパトラ」（第四話）は同級生のガキ大将を懲らしめるために、牛若丸、ガンマンと次々に変身した中のひとつである。「花の精」（第七話）では小さな花の精になって花の周囲を飛ぶが、とくだんストーリーの展開に意味を持つわけではない。「先生の花嫁候補」（第一二話）は悪戯で、「人魚」（第五四話）は、海に行ったアッコちゃんが気持ちよさそうということで海の中を泳いだという話しである。

そうした中で、「女神」（第三話）と「天使」（第二九話）では、女神や天使になって人を励ます役を演じているが、こうした変身は稀であり、シリーズを貫くモチーフになっているわけではない。

第二のタイプであるが、アッコちゃんの変身で圧倒的に多いのは動物、しかも小動物である。飼い猫のシッポナに始まり、ハト、犬、ネズミ、オウム、カエル、ウサギ、ブルドック、鷲、鷹、トビウオなど多様である。そのときの都合によって変身する。

なぜアッコちゃんは動物に変身するのか。大半は移動のためである。空を飛ぶことで素早い移動が可能になり、狭い場所でも通り抜けることができる。場所や距離によって変身する動物は使い分けられている。動物になると、動物と会話ができるよ

うになる。小動物への変身は、番組が視聴対象とした低年齢層には魅力的に映ったかもしれない。話しによっては、動物と会話するために変身が用いられることもある。動物と会話することで、通常では得られない情報を入手したり、動物の協力を得ることが可能となる。極端な事例では、人の姿のままで動物とコミュニケーションをしている（第七話では、人間の姿のまま鳥の声が理解できる）。ハトや子犬への変身が多いのは、それらがカワイく人に身近な存在であるからであろう。

第三のタイプであるが、小動物と同等に多いのは、「身近な人間」である。通っている小学校の先生や、母親、友だちに変身して、ちょっとしたもめ事や事件を解決しようとする。

とくに多いのは、小学校の音楽教師である森山先生、婦人警官、そして自分の母親である。視聴者である女児からすれば憧れの存在であり、物語の進行からすれば、小学生には認められない権限や情報、あるいは命令のできる者たちである。

ところで、こうした目上の者への変身がトラブルや問題の解決に直結しているかというと、必ずしもそうではないのである。かえって、事態を複雑にさせたり（身近な人間であるがゆえに話のつじつまが合わなくなる、中身は小学五年生なので対応ができない等）、混乱を引き起こすのである。学校や町内に同じ人間が同時に現れれば、関わった人間の間で情報は混乱し、結果として人間関係に齟齬が生じる。視聴者としては、面白いかもしれないが、魔法による変身は、テレビ番組上ですら必ずしも効果的に描かれていないのである。

アッコちゃんは第一話で変身に関する教訓を得る。ガキ大将の大将に一泡吹かせるために森山先生に変身したアッコちゃんは、偶然に担任の佐藤先生から抜き打ちテストのあることを聞く。森山先生に変身したアッコちゃんは、佐藤先生にテスト用紙を間違えているといって前回の回答用紙を手渡す。その結果、テストはなくなるが、佐藤先生は本物の森山先生と喧嘩になる。最終的に森山先生に変身して事態を繕い事なきを得るが、第一話でコンパクトの乱用を反省することになる。同級生のちか子や校長先生など、森山先生に変身したアッコちゃんに、周囲は違和感を覚えその結果森山先生の評判が下がることになる。

視聴者からすれば、変身によるどたばたは見ていて面白いかもしれない。しかしながら、斎藤美奈子が指摘する「「あたしこそが主役」という女の子の自己中心的な発想」は最初から痛手を被るのである。

男性に変身することがあるが、事例はひじょうに少ない。必要に迫られて、たとえば母親に小遣いの値上げを認めてもらう

ために父親に変身する（第一話）、留守番を頼まれて易者になる（第一一話）といった場合である。

コンパクトによる変身は、物語によってはかなりとんでもない物にも可能である。第四のタイプ「その他」である。カッパ、幽霊、お化け、雪女、一〇年後の自分などというものもある。さらには、こけし、ひな人形といった本来生き物でない物にも変身できる。

変身と言うよりは変装といった方が適切である事例も見られる。（四一話ではアッコちゃんは母親が驚くような服を着た姿に「変身」する。第五八話では、チンドン屋に変身するが、容姿は変わらずチンドン屋として利用する太鼓や旗を付けている）鏡による「変身」は、ストーリーによってはかなり都合よく使われている。

今ひとつ、アッコちゃんは変身とはまったく異なる魔法を使う。長距離の「移動」である。第四六話「南の島に愛の祈り」のストーリーは次のようなものである。秋田ケン吉の両親はインドネシアのスマトラでボランティの医師をしている。ある日、ケン吉のもとに母親が病気で倒れたというエアメールが届く。一時も早くスマトラへ行きたいケン吉であるが、叔母夫婦は日本で待つように勧める。アッコは「テクマクマヤコン、スマトラに行け」と唱えてスマトラへと移動したのである。

「鏡の道」という言葉が初めて使われるのは第五七話である。鏡の道を通って新しい担任の以前の赴任地を往復する。以降の放送で、頻繁ではないが遠方の移動に「鏡の道」が用いられている（第六五話、第七一話、第八九話）。各話の脚本、演出は異なっており、特定の人物が好んだ趣向ではなさそうである。「鏡の道」は明らかに鏡による「変身」ではなく「移動」である。物語を展開する上で、動物での移動に限界があり、面白くするために考え出されたアイデアではないか。

四、変身による能力

ところで、冒頭で指摘したように、魔法と変身に関しては、メディアとジェンダーを専門領域とする須川亜紀子の分析がある。これまでアッコちゃんが用いてきた魔法や変身に関する分析を元に、須川の考察を検討してみたい。

須川の著書『少女と魔法』の目的は二つで、第一は「日本の女の子向け「魔法少女」テレビアニメにおける魔法少女は、どのように表象されてきたかを、その作品が放映された時代の社会文化的コンテキストにおいて、通史的に分析すること」であ

る。第二は、「そのような魔法少女の表象を、日本のプレティーンの少女が、どのように理解、交渉、享受、共鳴、消費、利用をしてきたかを析出すること」[13]である。

須川の分析視点はポストフェミニズムなので、アッコちゃんが変身のための鏡を入手した経緯も次のように解釈される。「魔法の力がアッコの善行（割れた鏡を生物の死と同様に丁重に扱った）の報酬として与えられることは重要である。これは、フェミニニティと結びついた「適切な」ケアと思いやりが、普通の人間から、超自然力を持つ人間へアップグレードする機会を生産することを意味している。」[14]筆者は、須川のポストフェミニズムの分析自体は問題としない。興味深いのは「超自然力を持つ人間」という解釈である。アッコちゃんは超自然力の持ち主としてアニメの中で振る舞っていない。むしろ日常はアッコちゃんの変身をもってしても改変されず、より適切には日常の維持が望まれているように思えるのである。この点については後述することにする。

須川によると、コンパクトによる変身はもうひとりの自分になりたいという欲望とフェミニティの結びつきを表しているという。フェミニニティと美は魔法の力で顕在化する。

アッコは…魔法によってフェミニニティを「使用し」、女性の劣位を転覆させるのである。これはヘゲモニックな家父長制的イデオロギーを直接批判するラディカルなフェミニズムとは一線を画するものである。…アッコは、日本社会において女性が直面する困難を経験し、変身魔法でそれを解決する。女性の魔法の力は、フェミニズム的なエンパワメントとなっているが、もう一方で、保守的で家父長制的な思想とのせめぎあいの場にもなっている。[15]

須川が説明のために引用するカ所は、きわめて恣意的であり、ラディカルではないにしても家父長制的イデオロギーの批判と解釈することにはかなり無理が感じられる。また、魔法による他者への変身は少女の多様な潜在能力の表象であり、自己肯定の契機であるとも述べているが、一覧で示したような実際の変身を考えたときに、こうした説明にはなかなか納得がいかない。須川の結論は以下の通りである。

『アッコ』では、鏡を通じての変身は、フェミニニティと美に深く結びついている。それは美しくカワイイ、格上の女性に変身したいという少女の欲望や快楽を表象してい

るが、同時に変身は、ヘゲモニックなフェミニニティや審美観の表象性を常に問い直す場でもあり、同時に変身しない自己（むき出しの自己）の肯定の場としても機能している。[16]

興味深いのは次のような指摘である。須川自身はあまり意識していないと思われるが、「変身しない自己の肯定」は、魔法を使わない、あるいは魔法の限界を知ることで成立するのである。それはあいかわらず、両親との関わり、先生の指導、友だちとの衝突と友情によって達成されなければならないものである。そして「成長」は自分だけでなく、友だちを中心とした周囲の人間とともにである。魔法によってしかアイデンティティが構築されないとしたら、あるいは問題が魔法を使うことによってしか解決されないとすれば、それは現実や社会からの逃避を意味することになる。女児向けといっても番組は教育的な意味合いを十分に有している。

五、アニメで「魔法」はどのように表象されたか：原作マンガからの改変

先にも記したように、アニメ放送に先立って、赤塚不二夫によるマンガが集英社の少女漫画誌「りぼん」に掲載されていた。[17] アニメ化する際にマンガの設定に改変が加えられている。ここでは登場人物やストーリーではなく、本論に関わる部分のみを取り上げることにしたい。

まず問題になるのは、なぜどのようにして主人公の加賀美あつ子は魔法の鏡を入手できたのか、である。マンガではアッコちゃんは次のような出会いで変身が可能となるように描かれている。

自宅で留守番をしていたアッコちゃんのところへ外から野球のボールが飛び込んできて、大事にしていた鏡が割れてしまう。泣いていたアッコのところへサングラスをかけた男性が現れ、「われたかがみをいただきにきました。かわりにこれをうけとってください。」と申し出たのだった。男性はかがみの国から来たのであり、鏡を大切にしている人の鏡が割れたら新しい鏡と交換していると説明する。さらに男性は、アッコちゃんがいつ

『ひみつのアッコちゃん オリジナル版』
河出書房新社

も何か他の人になりたがっていることを知っており、その願いを叶えようと申し出たのだった。変身するためには鏡に向かって、なりたい者の名前をさかさまに唱えることで変身する。

この最初の設定に関して、アニメ版では複数の点が改変されている。第一は、力の付与者である。アニメでは鏡の国から来たサングラスのおじさんから、女性の鏡の精に置き換えられている。[18] 妖しげなセールスマンを連想させる男性から女性の精霊への変更は、いっそう低年齢層の女児を意識したものであるにちがいない。「魔法使いサリー」が番組として成功し、その後継として低年齢層をターゲットとしたときに、原作の持つ怪しさは解消されたことになる。

いまひとつ重要と思われるのは、「鏡」である。マンガでアッコが受け取った不思議な鏡はコンパクトではない。持ち運びには不便なかなり大きなものである。手鏡よりも大きく、全身がある程度まで映ることが望まれている。変身の呪文が逆さ言葉であったように、鏡が実際の鏡として機能することが、明らかに求められている。

他方で、アニメのコンパクトはたんなる変身のためのアイテムである。魔女が持つ杖と同じような機能を果たすが、女性が喜びそうなかわいらしいアイテム化は、毒気を抜かれた消費財に近い。魔法少女では、しばしば変身する際にアイテムを用いる。以後、不思議な力を発動させるためのアイテムは魔法少女では常用されるようになる。しかし、これは魔法少女ゆえの特徴というよりは、当時の少女をとりまく消費環境に問題があったように思える。

当時、演出を手がけた東映動画の池田宏は「あの時代ですでに商品化を狙った部分もあって、これは売れるぞ、と絵を作りながら話していましたね」と述べている。[19] 実際、当時のスポンサーである中嶋製作所から玩具化されて大ヒットになったという。[20]

昭和五四年に株式会社ぴえろを設立し、数多くの魔法少女アニメを制作した布川郁司は、『クリィミーマミはなぜステッキ

で変身するのか？』でなぜステッキで変身するのかを端的に説明している。

スポンサーである玩具メーカーからの要望は、「ステッキを使って変身してほしい」というもののみ、そこで伊藤さんと一緒に『クリィミーマミ』というタイトルを考え、「普通の女の子がスターになる」というコンセプトで原案を作りました[21]。

子ども向けアニメのスポンサーはほとんどが玩具メーカーであり、「女児向けに魔法のステッキを売りたい」というのがスポンサーの意向だった[22]。

着せ替え人形のリカちゃんが誕生したのは昭和四二年のことで、昭和四九年にはサンリオのハローキティが登場した。一九七〇年代は少女を巡る消費文化が急速に進展した時代だった。テレビアニメが黄金時代を迎えたのも七〇年代である。アッコちゃんのコンパクトはそうした時代の先駆けのひとつとなるものだったと考えてもいいだろう。

六、「魔法」か、それとも日常か

アッコちゃんにとって魔法はどれだけ重要なものだったのだろうか。たとえ王女様やモデルに変身しても、第三者からみればアッコちゃんとはわからない。アッコちゃんのもう一人の自分になりたいという少女の欲望は充足されたのだろうか。一時自分ではない他者にはなれても、変身した人物の能力が発揮できるわけではない。小学校の森山先生に変身したとしてもピアノが弾けるわけでもない。医者に変身したからといって医療行為を行えるわけでもない。結局元の自分に戻るしか、アッコちゃんには選択の余地がない。変身した人物のまま生活することは、それまでの人生や人間関係を帳消しにする行為である。変身後に元に戻れなくなったときのアッコちゃんの当惑や哀しみは大きく深い。

アッコちゃんは最終回で魔法の鏡を手放すことになる。大型台風のために点灯できなくなった灯台で、アッコちゃんは父親が船長をする客船に座礁の危機を知らせるため、コンパクトに世界中の鏡の光を集め点灯する。

アッコちゃんはコンパクトを取り出し、鏡の精に「鏡の精さ

んお願い、パパの船が沈んじゃうの。お願い、パパの船を助けて」と頼むのであった。鏡の精は、ひとつだけ方法があるがそのためにはこの鏡は二度と使えなくなると説明する。以下がアッコちゃんの答えである。

かまいません。日本丸と大勢の人を助けることができるんだったら、鏡の精さん、早くその方法を教えて

「テクマクマヤコン」と呪文を唱えて、「世界中の光よ集まれ」と命じるのである。これまでコンパクトが発揮したことのない能力である。その結果船は座礁を逃れるが、鏡の光は灯台の光と錯誤されて、灯台守の努力が賞賛される。コンパクトは消えてしまうが（消えるシーンはない）アッコちゃんの「ちょっぴりさみしいけれどしかたがありません」というナレーションが入る。

魔法少女においては、日常世界の優越性は明白で、魔法によって、友だちのと喧嘩からさまざまな社会問題が魔法によってつぎつぎと解決されていくわけにはいかない。魔法で病気が治るようであれば、医学の進歩は必要ない。最終的には自らの努力や周囲の援助によって問題が解決され、誤解が解けることが望ましいにちがいない。そうした意味で、魔法少女であっても常に最終的には 日常生活の肯定、もしくは日常を生きていくしかない私たちの世界の確認が行われる。

それでは、斎藤美奈子や須川亜紀子らフェミニズムの視点からの発想や分析は的外れであったかというと、必ずしもそうは思えない。つまり、「変身」が一人歩きしたのではないかと思えるのである。最終回でアッコちゃんは視聴者に向かって次のように話す。

内緒でとってもいいことを教えてあげるわ。あのね、鏡を大事にしてくれる人には、魔法のコンパクトをあげるかもしれないって、鏡の精さんがいってたの。だから、今度は魔法のコンパクトがあなたのものになるかもしれないのよ。

視聴者にとっては、アッコちゃんがハトに変身したか、犬だったか、お姫様だったかは関係なかったのかもしれない。問題は「コンパクトで変身できる」だったのではないか。アニメは明らかに、かわいく変身したいという少女の欲望や快楽への志向を刺激した。魔法のコンパクトは市販され、購入され、使用されたのである。そこでは、アッコちゃんが変身を隠さざるを得

なかった状況や、日常の小さなトラブルは最終的に友情や努力で解決される必要は存在しない。

七、魔法少女の展開

魔法少女といわれるアニメ番組の一覧を示すと次表のようになる。昭和四一年に「魔法使いサリー」が放映されて以来、コンスタントに魔法少女ものが放送されているが、一九八〇年代まで基本的に一年に一本の状態が続く。（個々の作品の特徴については紙面の制約もありここでは言及しない。）制作会社も東映動画、葦プロダクション、スタジオぴえろと数社にとどまっている。ところが一九九〇年代に入って突如として活況を呈し、六本の番組が同時期に放送されるまでになる。一九九二（平成四）年には「美少女戦士セーラームーン」の放送が開始されている。[23]

一九九〇年代以降、多くの作品が放送されただけでなく、作品内容が多様な展開を遂げた。従来の低年齢層向けから、需要層であった視聴者の成長に合わせるように、幅広い年齢層を対象にした作品が現れるようになった。

こうした魔法少女の最大公約数を拾ってみても、有意味な作業には思えない。日本ばかりでなく海外においても大きな反響を得た作品、現在まで多くの視聴者の支持を得ている作品に登場する「魔法少女」を分析することで、「魔法少女」の現代的で文化的な意味を理解したいと思う。この点については稿を新たにすることになるが、分析対象とすべきであろう作品は、「美少女戦士セーラームーン」、「プリキュア」シリーズ、そして「魔法少女まどかマギカ」が中心となるであろう。

テレビの魔法少女番組一覧

放送開始年	作品名	制作会社
1966	魔法使いサリー	東映動画
1969	ひみつのアッコちゃん	東映動画
1970	魔法のマコちゃん	東映動画
1971	さるとびエッちゃん	東映動画
1972	魔法使いチャッピー	東映動画
1973	ミラクル少女リミットちゃん	東映動画
1973	キューティーハニー	東映
1974	魔女っ子メグちゃん	東映動画
1978	魔女っ子チックル	東映
1979	花の子ルンルン	東映動画
1980	魔法少女ララベル	東映動画
1982	魔法のプリンセス ミンキーモモ	葦プロダクション
1983	魔法の天使クリィミーマミ	スタジオぴえろ
1984	魔法の妖精ペルシャ	スタジオぴえろ
1985	魔法のスター マジカルエミ	スタジオぴえろ
1986	魔法のアイドル パステルユーミ	スタジオぴえろ
1987	エスパー魔美	シンエイ動画
1988	ひみつのアッコちゃん	東映動画
1989	魔法使いサリー	東映動画
1990	魔法のエンジェル スイートミント	葦プロダクション
1991	魔法のプリンセス ミンキーモモ 夢を抱きしめて	葦プロダクション
1992	花の魔法使いマリーベル	葦プロダクション
1992	美少女戦士セーラームーンシリーズ	東映動画
1992	ヤダモン	グループ・タック
1992	姫ちゃんのリボン	スタジオぎゃろっぷ
1993	ミラクル☆ガールズ	ASATSU／ジャパンタップス
1994	赤ずきんチャチャ	スタジオぎゃろっぷ
1994	愛と勇気のピッグガール とんでぶーりん	ASATSU／日本アニメーション
1994	魔法騎士レイアース	東京ムービー
1995	愛天使伝説ウェディングピーチ	ケイエスエス
1995	ナースエンジェルりりかSOS	スタジオぎゃろっぷ
1995	怪盗セイント・テール	東京ムービー
1996	魔法使いTai!	トライアングルスタッフ
1996	魔法少女プリティサミー	AIC
1998	ふしぎ魔法ファンファンファーマシィー	東映アニメーション
1998	ひみつのアッコちゃん	東映アニメーション
1998	カードキャプターさくら	マッドハウス
1998	魔法のステージ ファンシーララ	スタジオぴえろ
1999	おジャ魔女どれみシリーズ	東映アニメーション
1999	神風怪盗ジャンヌ	東映アニメーション
1999	コレクター・ユイ	日本アニメーション／ NHKエンタープライズ21
2000	Cardcaptors	マッドハウス
2001	Cosmic Baton Girl コメットさん☆	日本アニメーション／ シナジージャパン
2002	満月をさがして	スタジオディーン
2002	ナースウィッチ小麦ちゃんマジカルて	タツノコプロ／ 京都アニメーション

放送開始年	作品名	制作会社
2002	プリンセスチュチュ	ハルフィルムメーカー
2003	マーメイドメロディぴちぴちピッチシリーズ	アクタス
2003	ウルトラマニアック	葦プロダクション
2004	ふたりはプリキュア／ ふたりはプリキュア Max Heart	東映アニメーション
2004	魔法少女隊アルス	STUDIO 4℃
2004	魔法少女リリカルなのはシリーズ	セブン・アークス
2004	ウィッチ -W.I.T.C.H.-	シップ・アニメーション
2004	Winx Club	レインボーS.r.l.
2005	撲殺天使ドクロちゃん	ハルフィルムメーカー
2005	ふしぎ星の☆ふたご姫	バースデイ
2005	シュガシュガルーン	studioぴえろ
2005	まじかるカナン	AIC ASTA
2005	奥さまは魔法少女	J.C.STAFF
2005	魔女っ娘つくねちゃん	XEBEC
2006	ふたりはプリキュア Splash Star	東映アニメーション
2006	大魔法峠	スタジオバルセロナ
2006	砂沙美☆魔法少女クラブ	AIC
2006	出ましたっ!パワパフガールズZ	東映アニメーション
2007	Yes!プリキュア5／Yes!プリキュア5GoGo!	東映アニメーション
2007	オシャレ魔女 ラブandベリー しあわせのまほう	トムス・エンタテインメント
2007	かみちゃまかりん	サテライト
2007	もえたん	アクタス
2007	しゅごキャラ!シリーズ	サテライト
2008	ストライクウィッチーズシリーズ	GONZO→AIC→SILVER LINK.
2009	フレッシュプリキュア!	東映アニメーション
2009	ジュエルペットシリーズ	スタジオコメット
2009	あにゃまる探偵 キルミンずぅ	サテライト／JM ANIMATION
2010	ハートキャッチプリキュア!	東映アニメーション
2010	ひめチェン!おとぎちっくアイドル リルぷりっ	テレコム・アニメーションフィルム
2011	魔法少女まどか☆マギカ	シャフト
2011	スイートプリキュア♪	東映アニメーション
2011	快盗天使ツインエンジェル～キュンキュン☆ときめきパラダイス!!～	J.C.STAFF
2011	放課後のプレアデス	GAINAX
2012	スマイルプリキュア!	東映アニメーション
2012	黒魔女さんが通る!!	シンエイ動画
2013	ドキドキ!プリキュア	東映アニメーション
2013	Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤシリーズ	SILVER LINK.
2014	ハピネスチャージプリキュア!	東映アニメーション
2014	まじもじるるも	J.C.STAFF
2014	ウィッチクラフトワークス	J.C.STAFF
2015	Go!プリンセスプリキュア	東映アニメーション
2016	魔法つかいプリキュア!	東映アニメーション
2016	ふらいんぐうぃっち	J.C.STAFF
2016	魔法少女?なりあ☆がーるず	バウンスィ
2016	装神少女まとい	WHITE FOX
2017	キラキラ☆プリキュアアラモード	東映アニメーション

注

（1）「魔法と変身―「魔法少女」形成期における「魔法」」『國學院大學紀要』第五十六巻、平成三〇年、二九―五五頁
（2）戦後の日本人の宗教性については石井研士『増補改訂版　データブック現代日本人の宗教』（新曜社、平成一九年）を参照。筆者はかつてテレビ・メディアを流れる宗教性について『テレビと宗教　オウム以後を問い直す』（中央公論新社、平成二〇年）を刊行したことがある。
（3）『魔女っ子大全集　東映動画篇』株式バンダイ、平成五年、三頁
（4）山口康男編著、テンブックス、平成一六年
（5）同、一二八頁
（6）須川亜紀子『少女と魔法―ガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、平成二五年、二八〇―二八一頁
（7）登丸あすか「アニメ番組が提示する魔法少女像」加藤佐和子他編『マンガ・アニメにみる日本文化』文京学院大学総合研究所、平成二八年、二一七頁
（8）『魔女っ子大全集　東映動画篇』株式会社バンダイ、平成五年、四六頁
（9）斎藤美奈子、筑摩書房、平成一三年
（10）同、一二六―一二七頁
（11）『魔女っ子大全集　東映動画篇』株式会社バンダイ、平成五年、一四〇頁
（12）同、一四三頁
（13）須川亜紀子『少女と魔法―ガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、平成二五年、九頁
（14）同、九四頁
（15）同、九九頁
（16）同、一〇二頁
（17）昭和三七年（一九六二年）六月号より昭和四〇年（一九六五年）九月号まで
（18）「テクマクマヤコン」という変身のための魔法の言葉が有名になったが、原作はなりたい者の名前を反対から読む、である。この点は本論においては重要視しない
（19）『魔女っ子大全集　東映動画篇』株式会社バンダイ、平成五年、一四三頁
（20）同、四六頁
（21）布川郁司『クリィミーマミはなぜステッキで変身するのか?』日経BP社、平成二五年、七二頁
（22）同、七六頁
（23）この点に関して『魔女っ子大全集』は「'89～'91年にかけて放送された新作「ひみつのアッコちゃん」と「魔法使いサリー」、この2大名作リメイクによって開拓された親子二世代にわたる支持層が、その後も派生し続けたためと考えるのが妥当であろう」（『魔女っ子大全集　東映動画篇』株式会社バンダイ、平成五年、三頁）としている。「魔法使いサリー」は昭和四一年に初回放送された後に、平成元年から第二シリーズが放送された。（平成元年（一九八九年）一〇月九日―平成三年（一九九一年）九月二三日）放送局はテレビ朝日系列で夕方七時から、全九〇話であった。「ひみつのアッコちゃん」は昭和四四年（一九六九年）の第一シリーズ後に第三シリーズまでテレビ放映された。第二シリーズは昭和六三年（一九八八年）一〇月九日から（一九八九年）一二月二四日まで、全六一話がフジテレビ系列で日曜日のゴールデンアワーに一八：〇〇―一八：三〇に放送された。第三シリーズは平成一〇年（一九九八年）四月五日から平成一一年（一九九九年）二月二八日まで）全四四話がフジテレビ系列で日曜九：〇〇―九：三〇に放送された。